

<講座3>「地域共同社会の実践から」

*パネラー 東京都聴覚障害者連盟 高齢部長 山口 英雄
特定非営利活動法人デフ・サポート足立 松本 敏子
特定非営利活動法人かるがもの会 石村 真由美

花田：入門講座のまとめとして、地域の生活をするとはどういう事なのか現状を各地域で運動しているケースを報告していただく。

山口：私の肩書は東京都聴覚障害者連盟高齢部長で福祉対策部を立てた。福祉を求めていく考え方が高齢者を変えていく。障害者の立場から行政で手配してもらおうという考え方をもって進めている。

松本：足立区の団体 NPO 法人デフサポート足立の組織の中に支援事業部。その中に足立区デフケアクローバーという、ろう高齢者の通所施設があります。そこでスタッフの一人として働いている。今日は所長の及川の代わりに参加。

所長の及川の代わりに松本が報告する。

花田：地域の福祉事業で絶対に必要なヘルパーの会がどういう組織なのか説明してほしい。

石村：かるがもの会は、2001 年東京都聴覚障害者連盟とともに企画して、ろう者 100 人のヘルパーを養成。そしてかるがもの会は 3 月に法人資格を取得。私の親も聞こえない。親戚の方も聞こえない人が多い。小さいときからそういう風に育ってきました。地域でのデイクケアサポートのスタッフ。区では生活支援員、成年後見人の役も持っている。

花田：ではまず高齢者はどういう活動を何人くらいで、どういう問題が起きているのか話してほしい。

山口：東京には聞こえない人が 4 万人近くいます。その中で耳が遠い人、高齢難聴者もいます。東京都のろうあ連盟の会員は 1200 人～1300 人ぐらい。その中の 600 人は 65 歳以上の会員。高齢の会員は全国的にも増えている。その対応が大変で各地域で格差があるので、どういう方法がいいのか。東京の場合老人ホームがないのでグループホームが立ち上がってきた。高齢者の活動を進めていきたい。東京の高齢者は全国から来た人がたくさんいる。手話もちょうと違う。高齢者が生きていくためには楽しみとか、どういう方法で支援していくのか多くの課題がある。東京は各区市で高齢者の食事会をしているところもあります。一人暮らしの高齢者が多い。なかまという考え方ろう重複の活動と同じ。相互支援は当たり前。

東京にはたましろの郷がある。支援は必要。もっと若い人に何が必要か伝えていかなければならない。それがないと福祉は落ちていく。2 年後には東京オリンピックを迎える。素晴らしいこと。けれどもオリパラはお金がかかる。福祉を削っ

て支出するということがある。障害者差別解消法から2年経った。健聴もろうも同じと考えて活動している。私も若くはない。この活動を始めて11年目になる。東京で頑張らないと全国に持って行ってもらえません。ろう者が楽しめる社会を作りたいと思う。

花田：東聴連会員の年齢65歳以上が増えている。若い人はいるが会員にならない。ろう運動だけでなく普通の社会も同じ。今一つの問題はヘルパーとの問題。次に地域のデイサービスの実態をお願いしたい。

松本：足立区は聞こえない方が多い。ろう協会の会員数も多い。やはり高齢化がだんだん進んでいる。具体的には2005年に足立区デイケアクローバーとして開始した。最初は火・土の週2回。場所も狭いため午前と午後を分けた。2006年に制度の変更もありデイサービス事業から地域活動支援センターとして事業を進めた。週2回から週3回水・金・土で行いその後事務所を2回引っ越した。1日の流れをDVDで上映。

DVDの概要

ろう協会は創立65周年を迎える。同時に会員の高齢化が進み独居やコミュニケーションから家に引きこもりが多い。地域で生きがいのある生活を目的とし、当センターを開設。

- ・ 2005年6月にデイサービスの認可を都と足立区から受け10月地域活動支援センターと事業名が変更され主体が都から足立区に移譲された。
- ・ 2012年に8年目。これからも手作り昼食で健康管理し、なかよく勤める。何か困ったことがあったら一緒に考えていくことを柱に利用者とスタッフが一緒になって足立デイケアクローバーを育てていきたい。
3年間で述べ34名平均年齢78歳。最高齢で89歳。半数が一人暮らし。

- ・ 1日の流れ

10時からお茶を飲んでおしゃべりタイム手話の話が咲く。1週間どのように過ごしてきたのか毎回その日のスケジュールをホワイトボードに書く。この時間に健康チェック、来所者の体温、血圧、月1回の体重測定を行い、問診でそれぞれの人に合わせたヘルスチェックを行う。待っている間におかず作りや花作り。おしゃべりも交えて自分のできるパーツを分担。

昼食はスタッフが全て手作りする。

創作活動は外部から講師を招いて、絵画、陶芸、習字など取り入れている。体調に合わせて一人一人配慮する。1時まで団らん。スタッフが事業者運営やスケジュール管理、行動予定の打合せ。

午後の活動開始。花に芯を通して仕上げるなどの作業。このような創作活動に毎月趣向を変えて行っている。

DVD 終了

松本：1日の流れを見てもらったが、8年前のものなので古いかもしれない。

花田：ろう協の会員がヘルパーとしてどういう活動をしているのか現状報告を。

石村：ヘルパーの仕事は介護事業者から「かるがも」にヘルパーを依頼の連絡が入る。それで派遣の形をとっている。聞こえる人、聞こえない人と分けることなく様子を見ないと分からない。誰を派遣するのかは私が担当している。学校に行けなかったので手話も文章もわからない人がいる。訪問介護に行ったときはホームサインのようなものを使って気持ちを引き出すことが大事。人間らしく暮らすには自分の感情を殺すのではなく、出す必要がある。それをつかんでスタッフに伝える。ヘルパーの仕事で行くときは事業所で利用者についての事前の話合いがある。いつも思うのは誤解することが多いこと。例えば記述に嘘が多い。でも本人が嘘を言っているのではなく、本当は読み取りや記録が間違っていることがあるのです。そうすると高齢のため痴呆を疑われているようだが本人は呆けていない。手話に昔のコミュニケーションの特徴が多い。介護保険の中でコミュニケーションのサポートがないが問題です。介護保険は聞こえる人のためだけのものではないですよ。ろう者も使える。それが平等ですよ。私は医者ではないが、私が見てうつつ子があるのではないのかなと思う場面がある。でも相談する場がない。病院に行ってもちゃんとコミュニケーションが取れないために気持ちを晴らすことができない。ヘルパーは話を聞くことが大事。「家族は手話ができない。家族より手話のできる人が大事」とおっしゃる方がいる。実際私の地域でも高齢者が病気になる時仲間が家に行き、お互い色々な確認をして家族のような仲間が手助けをしてくれる。色々な課題もあるがやはりヘルパーも学習の中にろうの特徴をいろいろ勉強する必要があると思います。地域包括センターのケアマネージャーたちもろう者の特徴を勉強する必要があります。健聴者の想像での基準に合わせて判断してはいけないと思う。

花田：初めて知った。者だけのヘルパー派遣でなく別の下請けもやっているところから依頼される。例えば、かるがもの会で同行支援サポートもできる。簡単な会話、掃除、買い物もする。できることはたくさんある。それを知っている人が少ない。そういう問題がある。依頼したいが、依頼方法が分からない。また、ヘルパーの意味を理解して選択できないと依頼できない。

足立の様子、帰った後のことを話してほしい。グループホームなど。

松本：通所して顔を見せてくれればこちらも安心できるが、しばらく休んでしまうと不安になる。それでファックスで連絡を取ってみると具合の悪いときはファックスの返事がないことが多い。連絡の方法がなくなってしまう。あるケースでは元気だった人がしばらく休んでファックスの返事がないので、地域の包括支援センタ

ーと連絡をとって訪問していただいたこともある。こちらだけの力では本人を支えるのは難しい。地域と関係機関と連携をとりながらやっていくことが大切。生活の場所というのは今後必要になってきます。団体の中でも協議を重ねてやっと小規模なグループホームを 11 月にはオープンする運びになり今後運営はどうなるのか不安ではあるが、資金集め等をしながら進めていければいいなと思う。

花田：うちのグループホームの現状報告をします。国も施設の時代は終わり、これからは地域のグループホームが良いとの話。具体的にどういう問題があるかいくつかあげます。施設の近くに一軒家があり、大家さんが引越すのでその際に借りた。「作業所からは遠い、自分の家にいた方が便利、グループホームに入ったため、もっと時間がかかってしまう」などの問題が出た。もう一つの問題はグループホームに入ると当然部屋代を払わなければならない。食費、水道代、電気代も払う。必要経費は自分で払う。我々からみると、親から離れていれば自立することによって必要なお金は稼ぐのが当たり前だと思う。ところが実際利用者からみると、家にいればご飯も親が作ってくれ部屋代も払う必要がない。食事も布団も全部親が準備してくれる。グループホームに入った為にお金がかかるという状況で、自立という意味をどこまで理解したかわからないまま入れてしまった。ですから作業場に近い場所に移転も考えている。我々の都合で作るのではなくて、あくまでも利用者の立場を考えたグループホームであってほしい。現実には問題が多い。もうひとつは、職員の確保ができるか特に昼間なら職員を配置できる。しかし、夜、女性が入った時は（同性介護で）泊まれる女性職員を確保できるか疑問。当事者にしてみれば泊まる人が毎回変わると落ち着かない。そういうことを考えるとグループホームもじっくりと考える必要がある。もう一つは高齢者の問題。東京には老人ホームがない。

山口：そうですね。全国各地あるのに東京にないのはおかしい。東京にはろう高齢者が増えているので、埼玉の「ななふく」に頼んで入っている。地元の人より東京の人が入っている方が多いと聞いている。本当に申し訳ないと思っている。東京に合ったグループホームが必要。施設希望者は多いが定員いっぱいに入れたい。都に出して対策を考えてほしいと思う。必要なのは聞こえない団体が盲ろう者に対しても含めて、ここも支援が必要。聞こえない人だけでなくそれらの人もともに支援が必要ということ。聞こえない人だけでなく、それらを含めて要望する必要がある。

花田：足立区はどうか？グループホーム、老人ホームの状況をお聞かせいただきたい。

松本：足立区ではハピネス足立の中にろう者を10名入れる場所を確保した。老人ホームにすぐに入れるわけではなく、「入りたい」と思っている人でも基準に達していないために入れたい人もいる。身体機能が落ちてやっと入れる方もいれば、なかなか基準で入れない人もいる。施設も空けておくわけではなく空いてしまえば聞こ

える人を入れてしまいます。入りたい時には、待たなければならない。

花田：今の話は大切な問題。私たちが高齢になったから「生活が苦しいから」とか、「一人で料理もできないから」「そろそろ老人ホームに入りたい」そういう時には受けてくれません。介護度5であれば、ろう、健聴者関係なく入れます。全国8か所～10か所ろう老人ホームあると言われたが、老人ホームといっても半分は健聴が入っています。埼玉にはどんぐりの近くに老人ホームがある。大阪、京都、北海道にもあります。そこは施設に近いところにある。東京にはない。では重複の高齢者が自動的に老人ホームに入れるのかということそれは違う。別の調査になります。どんぐりもろう重複の人が自動的に入れるかはそうではない。そのこともみんなで運動の中で理解しないと東京の中で老人ホームを作ったとしてもたましろのなかまがそこに入れる保証はない。東京の老人ホームといえるところがほしい。今、何人希望者がいるか東聴連で調査してほしい。一人暮らしで困っている高齢者がいる。そういうことを運動に結び付けてヘルパーと高齢部が環境を作っていくヘルパーの組織を作っていただきたい。

山口：まず自分の命を守ることが必要。そのための連絡、そのための連携サービスを進めている。グループホームに入る基準、どうする方法で入れるのか半分以上は知らない。現実にはわからない。入居条件もわからない。ちゃんと進めなければいけない。東京は高齢者が多い。ろう高齢者もいる。支援しても補助は受けられない。入っていない人にどう支援していくか簡単な問題ではない。国にもお金がある。だから大丈夫だと思う。

花田：ろう協の関係性作りは大切だと思う。またデイサービスの関係性も大切だと思う。足立区に住んでいるが足立区では認められていない。他の区のサービスは大丈夫。今の話をつなげていくとは大事だが、自由に会員なることも参加することできない。そういう人たちの様子をみていて、うまくつなげていくサービス、それはケアマネの大切な仕事だと思う。現場ではどうですか？

松本：通所される利用者は生活の中で色々なサービスを使うように。ヘルパーやデイサービスを利用する人が増えてきている。生活がうまくいかなかったり、トラブルが発生したりすると、サービス担当者会議それぞれのサービス事業所が集まって会議しています。そういうところにデフケアが呼ばれることが少しずつ増えてきた。連携をとって相談していく。ご本人のためにどうしたらいいのか一緒に考えていくことが大事だと思っている。

山口：高齢者でも違います。活動や趣味をしている方もいる。そういうところで情報をもたえずに家に引きこもっている方のサポートをどうしたらいいのか、長い目で見てふれあいをしていく。地域のイベントでその方を見つけて呼び止めて話していく。簡単に強制的にすることはできないので気持ちを通じ合わせながらやっていく。そうすると顔を合わせれば挨拶する。小さなことから大きな輪を作ってい

く。またグループホームについても入った人が良かったと状況を説明してくれればグループホームは良いところだと効果が上がる。

花田：我々が難しいと思うのは資格を持っている人たちの横のつながりが無い。縦割りになってしまう事です。成年後見人がつくとその相談ができなくなる。例えばろうあ相談員が個人宅に行って「何かありますか？」はダメ。相談が来るまで待つ。それでは相談員は必要なくなる。

山口：家に行ってもお知らせランプがないから勝手に入るわけにはいきません。家の中の電気はついていておかしい。勝手に入るわけにいかないから本人の娘さんに連絡して開けてもらう。亡くなって三日目だった。個人情報はどこまで必要なのか。SOSの場合、必要があれば守れるのか。法律の関係で難しい。そういったケースはありますか。

石村：一人暮らしはそういうことがある。地域で暮らすご夫婦でご主人が外出中に奥さんが無くなっているのを見つけてご主人に連絡した。ご主人に電話が繋がらなくて困った。洗濯物が干しっ放しの状態が続いていたこと、新聞が取り込まれていないことなどでおかしいと気付いた。それで警察に通報した。

花田：東京では昨年6ヶ月間で3～4人。1ヶ月半～2ヶ月気づかない。地域のデイサービスには絶対必要。聞こえないなかまの孤独死だけは絶対に無くしたい。

山口：人生終盤に来ると、病気を持っていたり終末がわかって準備したりしている人もいます。また財産をどうするのか。元気なうちに使いたい。たましろに寄付する。何か一言書いていなければ行政が持って行ってしまう。お年寄りには金持ちですよ。地域の高齢者が自分の人生を書いてあるものがあればいいな。やっぱり高齢者も元気なうちは人に迷惑をかけないよう次の時代にきれいな東京を残してあげる考えは必要。

花田：これから生活の場としてグループホームも動き出すと思うので、それらを地域で支えつつ高齢者の場所づくりを確保していきたい。

石村：高齢者だけではなく聴覚障害者は見てもわからない。また何に困っているのか見ただけではわからない。正確に理解してもらうのは難しい。高齢者の特徴として昔、今の手話が違いコミュニケーションの限界がある。文章の読解も難しい人がいる。コミュニケーションの壁を感じる。個人を尊重するというところに、ろうの高齢者が今まで損をしてきたと、楽しく生きていてよかったというサポートができればよいと思う。また、ヘルパーの場合、問題はある。関係機関に問題を持って行く役割がある。「かるがも」のスタッフ30名、10名はろう者、20名は健聴者。介護福祉士の資格をもっている方。ヘルパーの資格。ケアマネの資格を持っている。住んでいる地域もバラバラ。住んでいる地域の人を派遣している。採用したばかりなので勉強も必要。今後もうろうあ高齢者の未来を明るくするために学び活動していきたい。

花田：良い結論を出してもらった。昨日、入門講座1，2，3でそれぞれまとめ支援する側、受ける側。受ける側のことを考えないと支援できない。与えてあげるではなく同じなかまとして受ける側が考えながらの支援していくことが大切。昨日今日の総括としてまとめたい。